

大西康明／咲くやこの花インタビューvol.7

大西康明(おおにし・やすあき)【平成 25 年度 美術部門[現代美術]】



2017 年 1 月 14 日(土)～2 月 18 日(土)まで大阪のアートコートギャラリーで新作個展「空間の縁(ふち)」を開催中の彫刻家、大西康明さん。彼が作る彫刻は一般に想起されるオブジェ作品とはちょっと違うかも。ビニール素材の円柱群はシューッと膨らんではまたシューッと萎んでを繰り返し、空間を一定間隔で伸縮させる。また、ランダムに黒い円が重なり合う平面作品はモコモコのシルエットがクマの顔や波紋の広がりのようにも見え、想像力を刺激する。いわく「世界やその仕組みを、裏側から見るような状況」を想定しているそう。さらに、「何もないところにあるものを見出したい」と謎かけみたいなことを言い出す大西さん。果たして、なぜなぞの答えとは？ 作家と作品の魅力に迫ります。

◎取材・文・撮影＝石橋法子

「日常をひっくり返すことができるから、美術は面白い！」(大西)

はじめに、咲くやこの花賞を受賞されたときのお気持ちからお聞かせください。

率直に嬉しかったですね。当時はしばらく大阪で新しい作品を発表できていなかったのも、受賞記念の展覧会は僕にとってすごく良い機会になりました。会場の規模に合わせて作品を網羅的に見せることもできました。古いもので大学の卒業制作ぐらいのもの、中期の写真作品、そして最新作まで。会場となったアートコートギャラリーには以前からお声掛けいただいていたので、とても良い形で関係を始めることができましたと思います。

鑑賞者にとっても素敵な機会となりました。ところで、大西さんはどのようにして彫刻家を目指されたのですか？

そもそも父がバスの整備士、母は縫製の仕事と、ものを作っている環境で育ちました。父が日常から日曜大工をやっていて、何か新しいものをどんどん買うというよりは作ったり修理したりして生活を豊かにするような人でした。テレビゲームとかも買ってくれなくて(笑)。小さい頃は、父が角材から削り出した船や飛行機で遊んでいました。色とかもちゃんとマスキングをして塗ってましたね。今考えるとその頃見ていた光景は、何かしら影響があるのかもしれないですね。小中学校では絵が上手いと言われることもあったので、調子に乗って美術の高校に行って(笑)。最初はポスターを描いたり、グラフィックデザインに興味があったんですが、だんだんと立体を作る方に興味が出て、彫刻を専攻しました。



高校の授業で彫刻と出会われたんですね。

そうですね。油絵や日本画なども一通り体験はしたんですけど。美術高校は1クラスの男女比率が5:35で男子が極端に少なかった。彫刻は重いものを扱うことが多くて男手が必要で、当初は担当の先生に「男子こっち〜」と導かれたような感じだったんですけど(笑)。結果的に物質感のあるものを作ることに魅力を感じていました。

作品作りでは「世界やその仕組みを、裏側から見るような状況」を想定しているそうですね。



ちょっと大袈裟に言い過ぎたかもね(笑)。自分の目指す世界を持っているというよりは、何か空っぽのところに作用を及ぼすことで、その部屋自体がひとつの彫刻のようなものにならないかなと。単純に「世界を作る」のに青い球体で「地球のようなもの」を作るよりも、今見えている世界を意識して生きているけど、「そうではない部分がある」こととか、見えないものの存在に気付けるような場所を作りたいという感じかな。

「見えないものがある」ことに気付いていることが、まずすごいと感じます。

最近はその美術の面白いところだと思っていて。何かハッとする瞬間とか、もちろん映画を観たり本を読んだりしてもそういうことはあるはずなんですけど、美術によって日常を疑うとか、それがひっくり返される瞬間があって、それが美術の魅力の1つだと思っているんです。僕が作るのはただの「手掛かり」に過ぎないんだけど、その手掛かりによって、観る人が解釈を増幅させていく。そこから先の大きく広がっている世界は、それぞれの中であって。例えば、人によっては僕の作品を「コストが安い」と見る人がいる反面、

何か大きな「自然の体系を見てしまう」人もいたりして、そのギャップが大事だったりします。あんな（安価でどこにでもある素材の）ものであるからこそ、ひっくり返せることでもあると思うんです。

“空間そのものを彫刻に仕立てる”という発想は、どのようにして生まれたのでしょうか。

空洞を作ることに惹かれていて。それは彫刻を勉強していたときに、粘土で作ったものを石膏で型をとるところから来ているんです。「それ」そのものを作るのではなく、「それ以外の部分」を作ることで、中心がぽっかり空いている。何もないところに何か見出せないかなと。空っぽの大きい器を作って、それに鑑賞者の想像力を注ぐようなことをしているのではないかと思います。



作品作りで大事にしていることは？

現象みたいなことですね。目に見えない重力とか空気が動いていることとか。日常では気にも留めないようなものを可視化して、そのことによって及ぼされる効果について考えたりします。効果的な彫刻っていいかなと思ったり(笑)。以前制作した「空洞の彫刻」という作品は、部屋の中心に強い電球が光っていて、その周りにはいくつかの網状の構造体が天井から吊られています。その影が部屋全面に映し出されて、効果だけを見ている気がしたんです。構造体が回るたびに影が動いて部屋全体がグラッと動く。そんな風に作品が空間に及ぼす影響のようなものを際立たせたいと考えています。

光や空気など、自然界から着想を得ることが多いですか？

美しい自然の雄大な景色というよりも、自然や人為も含めて廻っていることとか、その体系を暗示させるようなものに目を向けたいとは思っています。それらが様々に影響を及ぼしてこの世界が成立しているとか、この一点がものすごく大きなものに影響を与えているというような感覚に近いかな。使っている材料は接着剤やポリシート、針金といった形にとどめにくい素材ではあるけど、そこから有機的な形態や動きを生み出すために選んでいます。

黒や白の接着剤を天井から糸のように無数に垂らして、ビニールシートや木の枝などの物体をふわりと宙に浮かせる作品も代表的ですが、素材との出会いも転機になったのでは。



黒い接着材は韓国に滞在していたときに見つけました。大学院を出てしばらくした後、奨学金を貰って海外の各地で制作する期間がありました。アーティスト・イン・レジデンスで、2、3ヶ月その場所に滞在して最後に作品を作って、僕は次に行くけど作品は展示されたままという。そのとき、展示が終わって作品を解体して送ってもらうより、その場の人たちに壊してもらって、その場限りでしか成り立たないようなものにしたと考えて。それまでは暗い部屋で透明のシートと光を使った作品を作っていたのですが、接着剤を使って、1回きりではあるけど、ある程度大きい量感で作品を制作できるということを発見しました。

色味は抑え、透過性があることも最近作の特徴です。

結果的に色はほとんど使っていません。白や黒だけでも何か意味を持ち始めるんですけど、例えばそれが赤だと簡単に血や血管に見えてしまうこともあるので、なるべくそうならない方が解釈の余地があって観

た人がどこからでも思い描きやすいと思うんです。透過性があると、作品を見るのと同時に奥の壁とか天井の構造とかまで見てしまうので、周りの空間やその環境も意識していることが重要なんです。

「思い描いたものが出来つつある段階が、自分の中でピークです(笑)」(大西)

開催中の個展「空間の縁(ふち)。すごく詩的なタイトルですね。

過去に制作した接着剤を使った作品は「体積の裏側」というタイトルです。一般的に、体積の裏側も空間の縁も、形にならないんですよ(笑)。でもそういうのを作っていて、ないものを指す言葉なんです。「ない」と思われているようなものを作品と共に置くことで、何かね、まったく違うものが見えてきたりしないかなと。タイトルによって、「何だろうな」と考え始められるような、余白のある入り口にしたいということでもあります。



私たちが美術を観てハッとするように、大西さんがハッとするものは？

作りたいものが思いつくのは、材料を手の中で遊ばせているときに起こったりします。接着材を垂らせば線のように見えてくるんだとか。手の中で工作をしていることの延長に作品がありますね。頭で考えていることに向かうより、手を動かすことで気付くことは多いです。次なる新しい素材が見つかる時もきっと、手の中で起こるという気がしています。

また、英語も流暢ですね。



流暢ではないんですが(笑)、最近は海外で制作することも多くて。ペンチ、はさみ、英語というぐらいの道具のひとつだと思えるようにしています。その現場でどんな感じでワイヤーを張るとか、海外で制作するうえで必要最低限なことは話せた方がいいので。

国内外で作品の捉えられ方が違ったりしますか？

一般的な反応は結構一緒だったりするんです。でも、”日本人が作ったもの”という見方をされることは多いと思います。儚さとか、繊細さとか、三次元のカリグラフィーみたいな感じで見られていることもあるんじゃないかな。勝手な解釈がそれぞれの中で膨らんでいくことは、僕の期待するところでもあるんですけど。

文化が違うと解釈の幅も制作者の範疇を超えそうです。アートでやりたいことはありますか？

特殊な環境や場所に作品が在ることには興味があります。例えば「六甲ミーツ・アート」という展覧会では、半分屋外のような場所で、台風が来たりして作業も展示も大変だったんですが、逆に不自由や現実問題にぶつかることで、修正や発見もあるので、そういった場所での発表は挑戦していきたいですね。

今回の展覧会では立体に加え、平面作品もありますね。

平面作品は、スタジオで自分と向き合うための対象だったりします。現場作業で制作する作品が中心なので、スタジオではほとんどその準備をしていたんです。平面の上で起こることと自分の時間で向き合うのが、アーティストとして理想的だと思っていた時もある。展示室に行って作業しないと結果が出ないものを主に作っていたので、平面の上で結果が出るものもあってもいいかなというバランスはありますね。



作品の制作から完成まで一番ツラくて、楽しい瞬間は？

楽しいというか、気持ちが高まるのは、作り始めて思い描いたものが出来つつある段階が自分のなかでピークです。だから、オープニングでお客さんが入っているときには、既に脱力感というかポカーンとしています(笑)。スタジオで、展示室の図面と向かったり、準備は同じことの繰り返しで面白みが無かったりもするけど、それを現場に持ってきて立ち上がる瞬間が一番ゾクゾクしますね。これを見たかったがために、これを作ったのだ！みたいな(笑)。でも、毎日が次の作品のための練習みたいなのところも実はあって。今回の作品も、もう少しだけ高さを出せば良かったかもとか、修正したい点も後になって出てきます。そこからの改良が次の作品を良くすることもあるし、全く別の方向を示してくれたりもするんですよ。

デビュー当時から様々な賞に輝くなど、順調な歩みですね。



先が見えない大変さはあると思いますが、最近は海外の展覧会に呼んで貰うことも多くなりました。その時は、僕の資料から「このタイプの作品をこの空間でやって下さい」とオファーされることが7割ぐらい。全く新しい作品を海外で作ることにはなかなかならないのでそれを繰り返していると、自分の中では作るものに面白味が無くなってきます。だから、ある程度自由の効く環境では新しいことをやりたいと思っていて、今回の大阪のアートコートギャラリーがそういう場所になっていて嬉しいです。

今年の予定は？

カザフスタンのアスタナで展覧会をやる予定があるので、それは実現させたいです。秋には以前にも行ったオーストラリアの予定があって、ドイツのニュルンベルクでのグループ展は計画中です。まだはっきりと決まっていないことも多いけど、他にもどこかの国で展覧会はやる(はず)ですよ。

10年以上の活動を振り返り、興味の対象など変化はありましたか。

素材は変わっても、目に見えないものを作るとか、そのものではなくその外側を作るとかはある程度一貫して制作に向かっていると思っています。最初は暗い部屋のインスタレーションや写真作品だったので、その表現方法は大きく変化していますが、自身の興味を少しずらしたり広げたりしながら、別の方法を探しているような感じかな。



次の一手に踏み出したい気分ですか。

今回の作品「空間の縁」は次の一手だと思って制作したんですけど、それをもう少し続けるか、まったく違うもの、新しい何かに向かうかはもう少しじっくり考えます。



★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】

……東京が本流なのだとしたら、そこに対して、独自の色を見付け出して進んでいることが大阪の魅力だと思う。本流への対抗であるし、こっちこそが本流だという自負でもある。そういう気質ですね。大きな流れがあるのにもう一本別の道を作って流していく感じ。それは美術においても同じなのかも。

【大西康明ウェブサイト】 <http://onys.net/>